

編集後記

本学会の開催回数が年2回から1回になることがほぼ決まった。年2回開催している他の学会も多くは開催数を減らそうとしておりきわめて自然な流れであろう。

全国規模の学会や研究会だけでなく、地域限定の研究会がある。私の勤務している地域でもその数はゆうに10をこえる。一つ一つの会はそれなりの歴史を有し、中には熱心な人たちが集まり立派な会が成り立っていることもあるが、一方、中央で既に発表した内容の2番煎じばかりの会であることも少なくない。抄録集をみていたら、別の研究会の抄録集に全く同じ内容が載っていたことに気づいたこともある。

もちろん地域に根ざした研究会はそれなりの意義を有する。新人たちの発表の場であるばかりでなく、近くの医師たちの交流する場でもある。確かに、近隣の先生にどのような専門家がいるのかを知られば患者を依頼するにも役に立つであろうが、狭い地域の事で、違った会でも集まる顔ぶれはだいたい似たりよったりである。

ある製薬メーカーの支店長が訪ねてこられた。話を聞くと、何か外科系の研究会を作りたいとの事であった。これだけ研究会があるのに無駄なことだと論じたが、社命であると悲壮なことをおっしゃる。何かよい考えがないかと詰問されるがいつこうに浮かんでこない。とりあえず外科医の最も興味のあることは癌の診断・治療であろう事から、癌を対象とした研究会を開こうとなった。地域限定の研究会の目的の大切な一つに、医学知識の普及があることから、癌について基礎・臨床の分野からの講演を拜聴するのがよいとの結論になった。第1回は会の今後を左右する重要なものであるが、講演を依頼する方は簡単に決まった。一人は私がまだ助手であったころ、偶然出会った居酒屋で真夜中まで飲み歌を歌った某大学の病理学教授であり、もう一人は母教室の教授である。いずれもわが国を代表するきわめて高名な研究者であり、また二人の意見が微妙に異なることも知られている。講演当日の会場は満員の盛況であった。講演内容も面白く演者が良いと聴衆も多い事が証明されたようであった。

翻って自分の事を考えると、これだけ多くの聴衆を集めたことがないような気がする。

講演後3人で飲みに行き久しぶりにおふた方の歌声を聞きながら、地域限定の講演会もまんざら捨てたものではないと思った。

(跡見 裕)